

アニマルパスウェイ研究会
生物多様性条約 第10回締約国会議 (COP 10)
サイドイベント参加報告書

平成23年3月

任意団体 アニマルパスウェイ研究会

COP10 サイドイベント

御後援、御協賛頂きました皆様

アニマルパスウェイ研究会

会長 湊 秋作

1. ご後援、ご協賛の御礼

2010年10月に愛知県名古屋市にて開催されました、生物多様性条約第10回締約国会議（以下；COP10）の期間中、任意団体「アニマルパスウェイ研究会」が、支援実行委員会主催のサイドイベントである、生物多様性交流フェアならびにフォーラムおよびエクスカージョンに参加致しました際、多大なるご後援、ご協賛を賜りました。

既に開催後数ヶ月を経過し、大変遅くなり恐縮に存じますが、改めまして御礼方々その結果を報告申し上げます。

尚、本サイドイベントは下記のご後援、ご協賛等を頂戴しました。

【共 催】財団法人キープ協会 やまねミュージアム、ニホンヤマネ保護研究グループ

【協 賛】清水建設株式会社、大成建設株式会社、東日本電信電話株式会社、
有限会社エンウィット、株式会社損害保険ジャパン、サラヤ株式会社、
日本アムウェイ合同会社、ホテルプリシード名古屋

【後 援】経団連自然保護協議会、社団法人 日本建設業団体連合会、
社団法人 日本土木工業協会、WWF ジャパン

【協 力】NPO 法人 ボルネオ保全トラストジャパン

2. 当会が参加した主なサイドイベント

COP10 会期中に開催された3つのサイドイベントにて、アニマルパスウェイに関する提唱を行った。尚、サイドイベント会期中の総入場者数は 118,647名 でした。

表1. 当会が実施したサイドイベントにおける来場者と紹介された新聞各紙

イベント	期間(準備含む)	来場者/参加者数	広報
生物多様性 交流フェア	10/16～10/29	約4,000名(パンフ配布 数) DVD 130枚配布	読売新聞 10/26 朝刊 (資料-1)
国際シンポジウム (フォーラム)	10/19	75名	中日新聞 10/19 朝刊 (資料-2) 日経産業 11/9 朝刊 (資料-3)
エクスカージョン (山梨県主催)	10/23～10/24	28名(日本人1名) (+モリス博士等 合計 35名)	山梨日日 10/25 朝刊 (資料-4)

(1) 生物多様性交流フェア

10月16日から10月29日まで白鳥会場にて開催されたサイドイベント、生物多様性交流フェアに出展した。COP10開催前の10月11日にNHKの特別番組にて紹介されるなど、来場者等へのアニマルパスウェイについての浸透度は高く、手ごたえのある反応が得られた。また、名古屋市をはじめ、アニマルパスウェイの計画を進める自治体や企業団体とも交流を深めることができた。そのほか、海外からも多くの来場を得て、普及活動を行うことができた。

ブース内の展示内容は、アニマルパスウェイのジオラマ・実物大模型、紹介パネル、モニタリング映像のビデオと、幅広い世代に楽しみながらアニマルパスウェイのことを知っていただけるような多彩な内容とした。



ブースへの来場風景



地元の子どもたちへの説明



アニマルパスウェイのジオラマ模型



アニマルパスウェイの実物模型

(2) 国際シンポジウム (フォーラム)

10月19日、フォーラム公式会場である名古屋学院大学体育館にて、「樹上動物の移動経路確保のため、分断された森林を結ぶ『アニマルパスウェイ』の取り組み」と題した国際シンポジウムを開催した。NPO法人ボルネオ保全トラストジャパン (BCTJ) 等、関係各所によるPRへの御協力、交流フェア会場におけるPRなどにより、75名の参加者(研究会メンバーを含む)を迎えての実施となった。

本シンポジウムでは4つの事例紹介を頂いた。発表要旨は別途添付しますが、以下に簡単に報告いたします。

1) Pat Morris 博士 (イギリス 元ロンドン大学)

海外事例として「Wild life & Habitat bridge」について紹介頂いた。土があり、樹木を植えた大きなブリッジでは、キツネ、ウサギなど6種の動物の利用が推測され、多額の費用はかかるが価値のあるブリッジであることを紹介頂き、また欧米の失敗事例も含めたお話や、道路や水路上への応用の可能性についても提示頂いた。



Pat Morris (パット モリス) 博士



ハビタットブリッジ



キツネが利用



トガリネズミが利用

2) 木村 幸一 氏 (東山動植物園／ボルネオ保全トラストジャパン)

ボルネオにおけるオランウータンの吊橋の事例について、「動物園の社会的役割 野生オランウータン保護活動 (吊り橋プロジェクト) に参加して」と題したご講演を頂いた。川によって分断されている森を橋でつなぎ、オランウータンの行動域を確保するため、丈夫な消防ホースを再利用して吊り橋を造る実践が紹介された。



木村 幸一 氏



川の上に造られた吊り橋



消防ホースを再利用した吊り橋



渡るオランウータン

3) 柳川 久 博士 (帯広畜産大学 教授)

国内事例として、「北海道のエゾリス用とモモンガ用エコ・ブリッジ」と題してエゾアカガエルのための交通事故防止対策、エゾリスのブリッジ、エゾモモンガ用の道路横断構造物、コウモリ類のためのカルバート等、ロードキルの防止事例が紹介された。



柳川 久 博士



道路下のカルバート



カルバートを利用するエゾリス



同 エゾモモンガ

4) 湊 秋作 (アニマルパスウェイ研究会会長／やまねミュージアム館長／関西学院大教授)

本研究会の事例として、会長の湊が「アニマルパスウェイの良き成果」と題し、アニマルパスウェイ研究会の設立経緯の他、山梨県北杜市に設置しているアニマルパスウェイ1・2号機に関する取り組みと、これまでのモニタリング成果等について報告を行った。

モニタリング録画データの解析により、ヤマネヤリス、ヒメネズミ等の利用が確認され、アニマルパスウェイの重要性を裏付けるものとなった。



湊 秋作 会長



アニマルパスウェイを渡るヤマネ

5) パネルディスカッション

第2部として、上記4名の演者に加えて、草刈秀紀氏（WWF ジャパン）、小松裕幸氏（アニマルパスウェイ研究会／清水建設株式会社）に登壇いただき、パネルディスカッションを行った。

「樹上動物のためのアニマルパスウェイの提唱」として、パスウェイの有効性と取り組みを成功させるため、以下①～③の3つのテーマについて討議を行った。

- ① 調査「事前、事後調査はどのように行ったか」
- ② 技術「動物を利用させるための技術」
- ③ 人のマネージメント「仲間作り、組織作り、お金づくりをどうしたか」



パネルディスカッション風景

6) 提案書の提示

パネルディスカッション終了後、アニマルパスウェイの必要性について、本シンポジウムの参加者に諮った合意内容を和文と英文の「提案書」としてまとめた。詳細は次項以降に示す。

提案書：和文

「樹上動物のためのアニマルパスウェイの提唱」

＝樹上動物を守ることは、森を守り、人を守ることにつながる＝

わたしたちは、環境と動物と人との状況により、大型、小型などさまざまなタイプのパスウェイを建築することを提唱します。

パスウェイを成功に導くには、ポイントがあり、パスウェイには社会への効果があるので、ここにシンポジウムの成果をまとめ、未来の普及への指標とします。

I. パスウェイの成功のための4つのポイント

1. 調査の実施

1) 事前調査

1：基礎的な生態調査：動物の状況の把握

2：建設地の選定調査：動物にとって効果的な建設の調査

2) 事後調査

動物の利用結果と課題の分析

2. 設計技術

各動物の行動、生態に適合したアニマルパスウェイの設計

3. 人とお金のマネジメントと経済効果への着眼

1) 市民、地域の人々、専門家、行政とのコラボレーション

2) 財団、行政、市民、企業などからの資金的支援

3) 建設による経済効果涵養への着眼の必要性

環境保全と経済効果の両立の具体化

4. 報告と広報

1) スポンサーとサポーターへの報告：費用分担者への責任として

2) 社会への広報：人々に樹上動物との共生を促す心を醸成する

II. アニマルパスウェイの効果性

パスウェイは以下のような効果を生み出します。

1. 生物多様性保全効果

2. 人々への環境教育的効果

3. 地域造りへの効果

4. 経済効果

5. CSR的效果 企業として

The “animal pathway” symposium at COP10

(protecting arboreal animals is good for forests and people)

It is widely recognised internationally that the construction of roads obstructs the free movement of animals. Reduced access to key feeding sites, reduced dispersal and reduced gene flow are among the resulting effects, increasing the probability of local extinction. Crossing roads also exposes animals to predation and the risk of being killed by passing traffic. Arboreal animals are especially badly affected due to their natural behaviour that involves travel via the trees rather than at ground level.

The speakers and subsequent discussion made clear that:

1. These problems can be reduced by the construction of “habitat bridges” (where a large bridge carries a strip of habitat across a road, planted with grass and shrubs or trees). Ten or more species may use a habitat bridge, but such bridges are extremely expensive.
2. Arboreal animals are less likely to benefit from such bridges as they require established woody vegetation such as trees and tall shrubs.
3. Special “animal pathways” can be constructed at much lower cost, and focussed directly on assisting arboreal species. These tend to be small, reducing the size and cost of such structures.
4. Video surveillance confirms that an arboreal animal pathway has been used over 800 times in three months, beginning almost immediately after construction.
5. The fact that four species of small mammals (including the Japanese dormouse) found and used such a bridge, even to cross a quiet road less than 20 metres wide, demonstrates both the suitability of such a bridge and the need for it.

The meeting proposed that there should be:

1. Research

- (a) To investigate basic ecology of arboreal species, especially their behaviour in relation to roads.
- (b) To select the best sites for construction of artificial animal pathways.
- (c) To show the result of building animal pathways by monitoring their use after construction.

2. Agreement on the best design(s) for animal pathways

These need to take account of animal size, ecology and behaviour, but also their cost.

3. Efficient management of human resources and money through:

- (a) collaboration between experts, local and national government and local people.
- (b) gaining financial support from foundations, governments, corporations and citizens.
- (c) reducing the effects of urban development.
- (d) raising awareness of environmental issues by focussing on arboreal species.

4. Reports and effective public relations:

- (a) to inform sponsors
- (b) to inform and engage supporters
- (c) to encourage widespread understanding of the benefits to society of an environmentally harmonious existence.

The meeting concluded that animal pathways:

1. Are important for the conservation of biodiversity and metapopulation function.
2. They help to maintain habitat connectivity in fragmented landscapes.
3. They are valuable for environmental education and community development.
4. They offer valuable economic and public relations benefits.
5. Benefit arboreal animals including high-profile “flagship species” (such as the Japanese Dormouse, a National Icon) and their successful conservation will benefit many other associated forest animals.

The meeting therefore proposed that more animal pathways should be built and their effectiveness be suitably monitored.

(3) エクスカーション

10月23日、支援実行委員会が開催した公式エクスカーションの中で、山梨県が主催した視察コースに北杜市清里のアニマルパスウェイ見学を加えて頂いた。

貸切バスは満員で、その大半は海外の方(35名中1名のみ日本人)でした。名古屋から清里に向かうバス車内では、1) 湊によるニホンヤマネとアニマルパスウェイの話、2) DVD映像を用いてのアニマルパスウェイ紹介、3) Morris 博士によるイギリスのヤマネとアニマルパスウェイの重要性の講義を展開した。

現地では、研究会のメンバーであるNTT 東日本-山梨スタッフが、アニマルパスウェイの取り組みを紹介し、その後パスウェイの視察を行い、大変好評であった。



アニマルパスウェイの視察



説明中のNTT 東日本-山梨スタッフ

3. その他

- ① 環境省のブースにて「いきものにぎわい企業活動コンテスト」受賞団体の1つとして『アニマルパスウェイ』が紹介されていた。また、コンテスト結果が冊子として、いくつかの関連ブースにて配布されていた。
- ② 経団連自然保護協議会の助成事例としても紹介され、企業と生物多様性イニシアティブ(JBIB)の冊子内でも、好事例として掲載されていた。
- ③ 10月25日、株式会社損害保険ジャパン(損保ジャパン名古屋ビル、参加者170名)のセミナーにて、湊がアニマルパスウェイに関する講演を行った。
- ④ 10月28日、大成建設株式会社山内社長が、経団連主催の閣僚級との懇談会(メッセ名古屋)にて、日本の生物多様性への取り組み事例として同社の取り組みを講演し、その中でアニマルパスウェイ研究会を紹介した。

4. 添付資料

- 1) COP10開催期間中アニマルパスウェイ関連イベントの報道記事
- 2) 国際シンポジウム発表要旨集